

2020年度(令和2年度)

人権尊重をめざす人権作品紹介

人権作品 詩部門 《入選者》

野洲小1年 澤田 紗雪

北野小3年 佐藤 実衣子

祇王小5年 定 遼乃介

中主小6年 松田 朋也

篠原小2年 岡田 遼磨

中主小4年 大石 陽樹

中主小5年 阿戸 伶奈

野洲小3年 宿谷 琉生

野洲小5年 兼松 杏衣

三上小6年 坂口 有紀

友だちっていいな

北野小3年 佐藤 実衣子

友だちがわらったら つられてわらう
 友だちがかなしかったら わたしもかなしい
 友だちが楽しかったら なぜかわたしも楽しくなる
 友だちががんばっていたら おうえんする
 わたしががんばっていたら 「がんばれ」と
 おうえんしてくれた
 友だちってすてきだな



幸せの花

中主小6年 松田 朋也

一人ひとりに幸せの花がある
 だけどかれることもある
 その時はまたみんなでさかせよう
 「ありがとう」という水をあげよう
 「大丈夫だよ」という肥料をあげよう
 みんなで咲かせよう
 一人ひとりの幸せの花を

人を大切にすること

野洲小5年 兼松 杏衣

人を大切にすること
 それは自分を大切にすること
 自分の心を満たしたら
 いじめや差別がなくなるから
 人を大切にすること
 それは人をおうえんすること
 はげましの声をかけること
 その一言で
 自分も相手も笑顔になるから

人を大切にすること
 それは人の意見を大切にすること
 いい意見も そうでない意見も
 まずは大切にしてみよう
 見る位置をかえてみたら
 いい意見になるかもしれない
 その人にしかだせないよさがあるから

み かみしやう ねん
三上小5年

よしやま り こ
吉山 莉子

ちゆうずしやう ねん
中主小5年

ひさまつ ゆ み
久松 由弥

や すしやう ねん
野洲小6年

おおほり み ち の
大堀 実知乃

きた のしやう ねん
北野小6年

あおき はると
青木 陽翔

ぎ oushoyou ねん
祇王小6年

ふくもと こうみ
福本 呼海

しのはらしやう ねん
篠原小6年

しまだ り こ
島田 莉子

や す きたちゆう ねん
野洲北中1年

なり た さ や
成田 采矢

や す きたちゆう ねん
野洲北中2年

やました ゆうへい
山下 侑平

や す きたちゆう ねん
野洲北中3年

あ だ ち ゆう ま
足立 優真

や す きたちゆう ねん
野洲北中3年

しまだ こうすけ
島田 光佑

人の笑顔をつないでいくためには

祇王小6年 福本 呼海

私は昔、よくテレビでいじめの話^{はなし}を耳^{みみ}にしていました。その時^{とき}、人権^{じんけん}について考^{かんが}えていました。なぜいじめがうまれるのか、なぜ友^{とも}達^{だち}にひどいこと^{こと}ができるのか、なぜ見^みて見^みぬ^ぬふりができるのかがとてもなぞに思^{おも}っていました。そんなことを頭^{あたま}の片^{かた}すみに入^いれながら友^{とも}達^{だち}と図^ず書^{しょ}館^{かん}に行^いきました。本^{ほん}を選^{えら}んでいる時^{とき}、とつぜん大^{おほ}きな泣^なき声^{こゑ}が私^{わたし}の耳^{みみ}に入^いってきました。泣^なき声^{こゑ}がする方^{ほう}へ行^いってみると、四^し、五^ご才^{さい}くらいの子^こが一^{ひと}人で泣^なきわめ^めているのを目^めにしました。私^{わたし}はどうしたらいいのかわ^わからず、他^{ほか}の人^{ひと}の様^{よう}子^すを観^{かん}察^{さつ}していまし^また。みんな、泣^なきわめ^めている子^こを見^みていくもの^{もの}の、首^{くび}をか^かしげ^げて通^{とお}りす^すぎ^ぎてい^いくだけ^{だけ}でした。中^{なか}にはめ^めんどく^くさ^さそう^{そう}な顔^{かお}をして通^{とお}りす^すぎ^ぎてい^いく人^{ひと}もいま^ました。私^{わたし}はそ^そんな冷^{つめ}たい顔^{かお}をした人^{ひと}を見^みて、「助^{たす}け^けない自^じ分^{ぶん}も冷^{つめ}たい人^{ひと}なんだろうな。」と思^{おも}い、がんば^{んぱ}って声^{こゑ}をかけ^けてみるこ^こにしま^ました。「迷^{まい}子^こ?」と聞^きくと、泣^ないてい^いた子^こがびっ^びくり^りした顔^{かお}で私^{わたし}の顔^{かお}を見^みま^ました。そして、「お母^{おほ}さん^{さん}が^がい^いひん^{ひん}の。」とい^いいま^ました。私^{わたし}は小^{ちい}さい子^こにとつ^{とつ}てお母^{おほ}さん^{さん}はと^とても大^{たい}切^{せつ}な存^{ぞん}在^{ざい}だと思^{おも}っていたので、は^はやくお母^{おほ}さん^{さん}を見^みつ^つけてあ^あげ^げたいと思^{おも}いま^ました。いっ^{いっ}しょ^{しょ}に^に来^きてい^いた友^{とも}達^{だち}と合^ご流^{りゅう}し、泣^ないてい^いた子^このお母^{おほ}さん^{さん}を探^{さが}していま^ました。す^すると急^{きゅう}に泣^な

いてい^いた子^こが「お母^{おほ}さん^{さん}っ！」とい^いて走^{はし}り出^だしま^ました。泣^ないてい^いた子^このお母^{おほ}さん^{さん}が私^{わたし}の^{ほう}方^{ほう}を見^みて会^え釈^{しゃく}をし^してく^くだ^ださい^いま^ました。私^{わたし}も会^え釈^{しゃく}をし、その場^ばをさ^さりま^ました。私^{わたし}の心^{こころ}はと^とてもポ^ポカ^カポ^ポカ^カし、あ^あた^たた^た温^{あたた}かい気^き持^もち^ちでい^いっぱ^ぱいで^でした。人^{ひと}を助^{たす}けるの^のがこ^こんなに^にも温^{あたた}かく^くてう^うれ^れしくなる^るんだ^だと感^{かん}じ^じるこ^ことが^ができ^きま^ました。その時^{とき}、ふ^ふと一^{ひと}つ^つの漢^{かん}字^じが頭^{あたま}の中^{なか}にう^うか^かび^びあ^あがり^りま^ました。その漢^{かん}字^じとい^いうの^のが、「人^{ひと}」とい^いう漢^{かん}字^じで^でした。思^{おも}い^いうか^かんだ時^{とき}はな^なぜ「人^{ひと}」とい^いう漢^{かん}字^じが^が出^でて^てき^きた^たか、理^り由^{ゆう}は分^わかり^りま^ませ^せん^んで^でした。と^とも^もだ^だち^ちとわ^わか^かれ、家^{いえ}に帰^{かえ}り、な^なぜ「人^{ひと}」とい^いう^じ字^じが思^{おも}い^いうか^かんだ^かか、が^がん^んば^ばって考^{かんが}え^えると理^り由^{ゆう}が^が見^みえ^えて^てき^きま^ました。その理^り由^{ゆう}は「人^{ひと}」の漢^{かん}字^じの^な成^{なり}立^{たち}ち^ちで^でした。「人^{ひと}」の漢^{かん}字^じの^な成^{なり}立^{たち}ち^ちは「ノ」の部^ぶ分^{ぶん}を「\」の部^ぶ分^{ぶん}が支^さえ^えて^てでき^きてい^いま^ます。よ^よう^うす^する^るに人^{ひと}が助^{たす}け^け合^あっ^つてい^いる^る様^{よう}子^すから^から^から^らでき^きてい^いま^ます。そ^そして^{して}その時^{とき}、な^なぜ^ぜい^いじ^じめ^めが^がう^うま^まれる^るの^のか、^とい^いう^うな^なぞ^ぞが^がと^とけ^けて^てい^いき^きま^ました。そ^それ^れは^はい^いじ^じめ^めて^てい^いる^るが^がわ^わが^が友^{とも}達^{だち}と助^{たす}け^け合^あお^おう^うとし^しない^いか^から^らだ^だと思^{おも}いま^ます。人^{ひと}が助^{たす}ける^るか^から^ら笑^{えが}顔^{かお}に^になる^る、人^{ひと}に^に助^{たす}け^けら^られる^るか^から^ら人^{ひと}を^を助^{たす}ける。そ^そんな^なや^やり^り取^とり^りが^があ^ある^るか^から笑^{えが}顔^{かお}が^が広^{ひろ}が^がっ^つて^てい^いる^ると思^{おも}いま^ます。人^{ひと}に^には^は人^{ひと}を^を助^{たす}ける^る権^{けん}利^りは^は絶^{ぜつ}対^{たい}に^にあ^あり^りま^ます。な^なので^で私^{わたし}は^ち小^{ちい}さい^{さい}な^なこ^こと^とか^から^ら人^{ひと}を^を助^{たす}け^けて^てい^いき^きたい^いと思^{おも}いま^ます。

あたりまえについて

野洲北中2年 山下 侑平

「えっ？家庭科の先生が男で、技術の先生が女なん？逆ちゃうんか？」

中学校に入学して、最初の授業で先生の自己紹介の時、僕が真っ先に思った感想だ。家庭科といえば、料理や裁縫で、僕の家では、ほとんど母や祖母がやっているし、僕の友達の家もたいていそうだ。そして、技術とはといえば、木を切ったりする力のいる作業や、作図などといった、いかにも男性がするような内容だ。案の定、家でこの話をすると、母も父も祖母も、「えっ？珍しいなあ。」と口をそろえて言った。なぜなら、学生時代に、家庭科が男の先生、技術が女の先生に出会ったことがないからだ。きっと、多くの人も同じようなことを言うだろう。

僕が、小学6年生の時に、入っていた少年野球チームでも、同じ言葉を耳にした。

僕の妹も、一緒に野球をしていました。妹がなぜ野球に入ったかという、体験に行った時、楽しかったのと、他にも女の子が、二人いたからだ。妹は自分の意志で、野球を始めたのに、「女の子なのに野球やってんの、珍しいなあ。」とか、「お兄ちゃんがやっているか

ら、野球入ったんやろ。」と言われていた。僕は、それを聞いて、「えー珍しいかなあ。」と思った。

女の子が野球をしたり、家庭科の先生が男だったり、技術の先生が女だったりすると、なぜ珍しいと思われるのか。それは、今までの日本の社会が、料理や裁縫は、女がするものとか、野球は男のするスポーツなどといった、固定観念があったからだと思う。だから、自分がやりたかったことができなかつたり、男だから、女だから、と決めつけられている風潮が、今でもあるから、珍しがられている。実際、僕もそうだった。

男だから、女だからと決めつけずに、自分が本当にやりたいことができる社会になっていけばいいと思った。そして、それが珍しがられることなく、「あたりまえ」となる世の中に僕たちがしていかなければいけない。

これから僕は、人とのちがいを認め、男だから、女だからというまちがったことを無くすためには、まず自分には何ができるかを考えてそれを行動にうつすことが大切だなと思いました。

人権作品 標語部門 《入選者》

うれしいな みんなわらって いいきもち

祇王小1年 田中 源

たすけあい うれしいきもち いっぱいに

中主小1年 木村 遼真

友だちは みんな大切 自分もね

篠原小3年 やまぐち れん と 山口 蓮人

あいさつは みんなをつなぐ あい言葉

北野小4年 岡本 彩葉

さみしそう あの子といっしょに 遊ぼうよ

三上小4年 みかみしょう ねん まつもと にこ 松本 仁瑚

考えよう 言っているいいこと 悪いこと

野洲小5年 やすしゅう ねん かしはら たくと 柏原 琢人

ぬけだそう 見ているだけの 自分から

野洲小5年 やすしゅう ねん なかじま りょうすけ 中嶋 陵介

一人じゃない 誰かが絶対 そばにいる

野洲中1年 やすちゅう ねん たなか あいり 田中 愛莉

ちがっていい 同じ人など いないから

野洲北中2年 やすきたちゅう ねん ちとつか みつき 元岡 実希

それぞれの 人のありがた みとめよう

中主中3年 ちゅうずちゅう ねん しらす らいと 白須 礼偉斗

じん けん さく ひん
人権作品

ぶ もん
ポスター部門

にゅうせんしや
《入選者》



や すしやう ねん かつ そうすけ
野洲小1年 勝 壮輔



きた のしやう ねん きたがわ なおき
北野小1年 北川 尚樹



み かみしやう ねん つつみ こまり
三上小3年 堤 小鞠



み かみしやう ねん みわ ゆめ
三上小3年 巳波 結芽



ぎ おうしやう ねん はやし ななこ
祇王小4年 林 柳々子



しの はらしやう ねん とみはら たまり
篠原小5年 富原 玉莉



ちゅうずしやう ねん ふくだ ゆうあ
中主小5年 福田 夕愛



ちゅうずしやう ねん ささき なお
中主小6年 佐々木 菜緒



ちゅうずしやう ねん よしかわ みお
中主中2年 吉川 瑞音